

## 小児期の成長・発達に関する動画を用いた授業方法の検討（第2報）

### Examination of Teaching Method Film Utilized During Pediatrics Growth and Development (the second report)

加藤千明<sup>1</sup>，栗田泰成<sup>2</sup>，榛葉益枝<sup>1</sup>，石舘美弥子<sup>1</sup>，加藤和子<sup>1</sup>

Chiaki KATO, Yasunari KURITA, Masue SHIMBA, Miyako ISHIDATE, Kazuko KATO

1 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

2 常葉大学健康科学部静岡理学療法学科

Department of Physical Therapy, Faculty of Health Science, Tokoha University

#### 【要旨】

本研究は、医療系大学生に対する小児期の成長・発達の学習への動機づけ及び継続的学習への発展をねらいとした授業方法を検討する為の記述的比較型研究である。

筆者ら<sup>1)</sup>は、昨年度「人間発達学」の授業において、小児期の成長・発達に関する動画を活用した授業を展開した。その結果、動画は学生の感情を刺激し、生活する子どもの現象と新たな知識が統合されることにより、学生の知的好奇心を萌芽し、継続的学習の動機付けとなる可能性が示唆された。本研究の目的は、前年度に準じた教授方法を展開し、学生の感情に与える影響を検討し、今後の授業方法を構築するための資料とすることである。研究対象は医療系大学生1年164名。研究方法は、前回同様3回の講義中に小児期の発達を追った動画を2種類使用し、授業での興味・関心をもった事項について自由記述を求めた。学生が記述した感情表現「感動した」「感心した」「驚いた」「凄い」「面白い」「素晴らしい」「びっくりした」「興味・関心をもった」「尊敬する」「不思議に思った」「わかった」「もっと知りたい」を抽出し、前年度の結果と比較した。その結果、昨年度と同様、1回目の授業後は「驚いた」「凄い」「興味・関心を持った」、2回目の授業後は「驚いた」「わかった」、3回目の授業は「わかった」の記述データが多くみられ、授業進度に従い特徴的な感情の変化が認められた。動画を取り入れた授業方法は、小児期の成長・発達の興味・関心を引き出し、継続的学習の動機づけとなることが明らかとなり、本方法論の影響によるものと考えられた。

---

Key Words : 動画, 感情表現, 小児期の成長・発達, 動機づけ, 授業研究

## 1. はじめに

人間の健康や生活行動援助を専門的に学修する医療系大学に在籍する学生にとって、人間の総合的理解における成長・発達の知識の修得は重要である。ここで得られた基礎的知識は専門領域の知識へと発展していくねらいがある。本学健康科学部では、『人の一生を胎生期、新生児期、乳児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期の発達段階別に身体的、心理的、社会的側面から理解する。また、ライフサイクルから見た生涯にわたる発達課題と人間を総合的に理解するための基礎的知識を学ぶ』ことを目的とし、一年時後期に科目「人間発達学」を設定している。その中で、筆者らは科目の小児期（乳児期・幼児期・学童期）を3回担当している。子どもとの接触経験が子どものイメージ形成や理解促進に繋がる<sup>2)</sup>と言われるが、学生が小児期の成長・発達を断片的ではなく連続的な捉え方が出来るほど、子どもとの接触経験ができるとは限らない。子どものイメージ化や学習の動機付けを促進する為に視聴覚教材の活用が有効であることより<sup>3) 4) 5)</sup>、昨年、筆者ら<sup>1)</sup>は小児期の成長・発達を追った2種類の動画を活用した授業を展開した。その結果、動画を活用した授業は①学生の感情にインパクトを与え、②生活する子どもの現象と知識の統合が知的好奇心を萌芽し、③継続的学習のきっかけとなる授業方法の一つであることが示唆された。

本研究の目的は、先行研究で得られた結果が、別の学生に対して同じ授業方法を展開した場合に、前年度と同様の効果を得られることを確認し、学習者の視点にたった授業方法を構築するための資料とすることである。

## 2. 「人間発達学」の概要

### 2.1. 授業回数及び時間

授業は週1回実施し、1回あたり90分で計3回担当した。

### 2.2. 授業のねらい及び方法

授業回数ごとに授業のねらいと方法を示す。

#### 【1回目】

授業のねらい：アリサの成長を通して、成長・発達の学習への興味・関心を引き出す。

授業方法：

- ① 映画『アリサ・ヒトから人間への記録-』（生後6ヶ月～6歳11ヶ月までの成長・発達の記録）を約80分視聴する。
- ② 学生は映画を見ながら乳児期～幼児期の発達のプロセスを示す画像を通して整理する。

#### 【2回目】

授業のねらい：乳児期・幼児期・学童期各期の発達の特徴について知識を得る。

授業方法：

- ① 乳児期・幼児期・学童期の正常な成長・発達の特徴をPowerPoint（マイクロソフト社製、以下PowerPointと表記）と紙媒体の資料を用いて説明する。
- ② 学生が持参した母子健康手帳を基に成長・発達についてグループワークをし、発表する。

#### 【3回目】

授業のねらい：小児期における正常な成長・発達の逸脱や異常状態の知識を得て、継続的学習への動機づけとする。

授業方法：理学療法学科教員が、理学療法学科で必要な知識「異常をどういう視点で観ていくか」について、PowerPoint及

び紙媒体の資料と小児理学療法の事例の動画を用い説明する。

### 2.3. 教材の内容

動画 A：映画『アリスーヒトから人間への記録ー』：ひとりの女の子の生後6か月から6歳11ヶ月までの7年の成長を追ったドキュメンタリー。家庭でも保育園でも一切文字の読み書きを教えない方針のもと，“アリス”が保育園で会う子どもや姉妹と主に成長する様子が描かれている。“アリス”は、発育に応じて、溢れるような意欲と体力，創造力，仲間を思いやる優しい心を獲得していく。製作：小島義史，野原嘉一郎，監督・演出：山崎定人 1986年制作。制作協力：さくら・さくらんぼ保育園創設者故斎藤公子，上映時間78分，製作会社：青銅プロダクション・共同映画。

動画 B：脳性麻痺患児の小学3年生から小学6年生までの4年間を更衣（靴下の着脱）、歩行（平行棒内および歩行補助具〈posture control walker：P.C.W.〉使用）について経時的に記録した動画（本人及び家族の同意を得ている）。理学療法の介入により運動発達の促進と日常生活活動の改善が見られた動画を経時的に収録している。研究者の製作による動画。

## 3. 研究方法

### 3.1. 研究デザイン

記述的比較型研究

### 3.2. データ収集方法

データ収集方法は3回のそれぞれの授業後に、学生が感じたこと思いのまま表現することをねらいとし、自記式質問紙に自由記述して貰った。

### 3.3. 研究対象

研究対象は「人間発達学」を履修登録した学生のうち研究協力が得られたS大学健康科学部学生とし、平成25年度は看護学科1年生63名，理学療法学科1年生70名の計133名であった。平成26年度は看護学科1年生87名，理学療法学科1年生77名，計164名であった。

### 3.4. 研究期間

研究期間は、平成25年度は平成25年10月10日～平成25年10月24日で、平成26年度は平成26年10月9日～平成26年10月24日であった。

### 3.5. 調査内容と手続き

各回授業終了直後に、以下の質問に関してA5用紙に自由記述して貰った。

《平成25年度》

- ① 興味・関心を持った事項
- ② 疑問に思ったこと

《平成26年度》

1・2回目の授業後

- ① 興味・関心を持った事項
- ② 疑問に思ったこと

3回目の授業後

- ① 学んだこと
- ② 疑問に思ったこと

### 3.6. 分析方法

分析は質的及び量的に分析した。質的データの分析は、学生が記述したデータを文脈単位の整理したものを素データとし、素データの中に12種の感情表現「感動した」「感心した」「驚いた」「凄い」「面白い」「素晴らしい」「びっくりした」「興味・関心をもった」「尊敬する」「不思議に思った」「わかった」「もっと知りたい」が含まれる文を記録単位で抽出した。更に記録単位で抽出した記述データを感情表現毎に分類し整理した。素

データから記録単位の抽出部分の一致，感情表現が含まれる文の一致を，小児看護学教員4名，理学療法学科教員1名の研究者により確認し，教員間の意見を一致させた．また，データの意味内容について繰り返し検討を行い一致の向上をはかった．感情表現の12種類は，平成25年度と平成26年度の感情表現は同様とし，学びの構造<sup>6)</sup>を参照し，感覚的感情表現として「感動した」「感心した」「驚いた」「凄い」「面白い」「素晴らしい」「びっくりした」，知的活動が加わった感情表現として「興味・関心をもった」「尊敬する」「不思議に思った」「わかった」「もっと知りたい」とした．

量的データの分析は，平成25年度と平成26年度の記述データを集計して，学生一人当たりの感情表現のデータ数を算出し，年度比較を行った．解析は統計ソフトSPSS (Ver.19.0) を使用し，年度間の比較はMann-WhitneyのU検定を用いた．

なお，記述データの内容の各文章には，整理・分類のために，学科・授業回数・文章番号を付した．すなわち，看護学科学生のデータには，“K1-1”，静岡理学療法学科学生のデータ“R1-1”のようにした．

### 3.7. 調査手続き及び倫理的配慮

対象学生に対し，研究目的，研究概要，本人の任意性の保障と成績と無関係であること，同意後の拒否・撤回の保障などについて紙面と口頭にて説明し，紙面で同意を得た．本研究は常葉大学研究倫理審査会の承認を受けた（承認番号：研静15-13，研静14-12の変更継続）．

## 4. 結果

### 4.1. 回収率

平成25年度は，看護学科1回目；93%（60名），2回目；90%（57名），3回目；88%（56

名）であった．理学療法学科1回目；98%（69名），2回目；98%（69名），3回目；100%（70名）であった．平成26年度は，看護学科1回目；96%（83名），2回目；95%（82名），3回目；95%（82名）であった．理学療法学科1回目；100%（72名），2回目；95%（69名），3回目；93%（67名）であった．有効回答率は100%であった．

### 4.2. 感情表現のデータ数の客観的比較

平成25年度と平成26年度における，学生一人当たりの感情表現のデータ数を表1に示す．平成25年度の学生一人当たりの感情表現の合計データ数は，1回目1.30，2回目0.98，3回目1.20，平成26年度は，1回目0.94，2回目1.14，3回目0.96であった．

感情表現「感動した」「感心した」「驚いた」「凄い」「面白い」「素晴らしい」「びっくりした」「興味・関心をもった」「尊敬する」「不思議に思った」「わかった」「もっと知りたい」12種類全てについて，平成25年度と平成26年度の授業年度による比較では有意差は認められなかった．

### 4.3. 感情表現にかかわる記述データの質的比較

学生の感情表現が含まれる記録内容について，授業回数別に年度による相違について比較した．平成25年度と平成26年度の1回目から3回目について，年度及び授業回数別に表2に示す．記述内容は，各感情表現の記述データが重複しないよう各感情表現に対し1データを基準とし，代表的な記述データを選定した．平成25年度と平成26年度は同一の基準に従い，各感情表現の代表的な記述データを抽出した．記述データは，5名の研究者間で確認し統一し選定した．

表 1. 学生一人当たりの感情表現のデータ数の年度比較

年度	平成 25 年度			平成 26 年度			U	p	
	授業回数	1 回目 (N=129)	2 回目 (N=126)	3 回目 (N=126)	1 回目 (N=155)	2 回目 (N=151)			3 回目 (N=149)
感情表現									
感動した		0.10	0.04	0.00	0.04	0.01	0.00	17.50	.934
感心した		0.07	0.00	0.00	0.03	0.01	0.01	14.00	.589
驚いた		0.25	0.14	0.20	0.13	0.28	0.07	19.00	1.000
凄い		0.30	0.18	0.05	0.32	0.14	0.03	12.00	.394
面白い		0.10	0.11	0.05	0.07	0.10	0.04	15.00	.699
素晴らしい		0.03	0.00	0.00	0.03	0.00	0.00	16.00	.818
びっくりした		0.03	0.07	0.00	0.03	0.03	0.00	24.00	.394
興味・関心をもった		0.20	0.19	0.27	0.17	0.19	0.24	12.00	.394
尊敬する		0.02	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	12.00	.394
不思議に思った		0.00	0.04	0.02	0.01	0.01	0.00	15.50	.699
わかった		0.13	0.14	0.43	0.07	0.36	0.40	19.50	.818
もっと知りたい		0.07	0.07	0.18	0.03	0.00	0.16	12.00	.394
合計データ数		1.30	0.98	1.20	0.94	1.14	0.96	16.00	.818

Mann-Whitney の U 検定

表 2. 学生の感情表現にかかわる記述データの年度比較

年度	平成 25 年度	平成 26 年度
授業回数	記述内容	記述内容
1 回目	<p>K 1-2 0-6 歳にかけての成長のスピードが物凄くて驚いた。</p> <p>K 1-8 幼児期は一人遊びからどんどん仲間遊びを覚えていくことが凄い。</p> <p>K 1-21 自分なりに一生懸命考えて行動することが幼い時からできることが凄いと思った。</p> <p>K 1-22 子どもが描いた絵をみることで、子どもの考えや成長がわかることが面白い</p> <p>K 1-28 どんな事でも先生や友達の真似をして覚え、工夫していくことができることに驚いた。</p> <p>R1-34 自分たちも同じように成長してきた。人の成長は面白い。</p> <p>R1-53 成長過程で失敗後に工夫をし、自分なりに形を作って成功させていることに感動した。</p> <p>R1-56 3歳で人にもものを教えるようになることに感心した。</p>	<p>K 1-63 たった数か月で子どもは急成長し、先生や大人の真似をしていく成長の速さにすごいと思いました。</p> <p>K 1-76-2 だんだんできることや、友達との協力が増えていくのを見て、面白いなと思いました。</p> <p>K 1-58-3 学習能力の発達がとても早くてびっくりした。</p> <p>K 1-74-1 6年でこんなにも成長することを知って感動しました。</p> <p>R 1-20-3 子どもの学習能力と運動能力のすごさに感動しました。</p> <p>R 1-7 乳児期から幼児期へ成長していくときの成長の早さに驚いた。</p> <p>R 1-65 人間は色々考えて成長するのが分りおもしろかったです。</p> <p>R 37 年をとるにつれて、自律し、自己主張が強くなる。得た能力を惜し気もなく教えようとする態度はすばらしい。</p>
2 回目	<p>「驚いた」</p> <p>K2-8 検診では外から脳の成長を確認していることに驚いた。</p> <p>K2-9 自分が幼いころに経験したのあることも資料にあり、必ずあるんだと驚いた。</p> <p>R2-13 乳児期の発達のあまりの速さに驚いた。</p> <p>R2-41 恐れが恥ずかしがりやに分化したり、怒りやうらみ、失望に分化したりすることに驚いた。</p>	<p>「驚いた」</p> <p>K 2-67-2 脳の発達が6歳でピークになってしまうことには驚きました。</p> <p>K 2-65-1 成人と乳児期・幼児期違うことがたくさんあって、うまれてからの発達は驚くことだらけ。</p> <p>R 2-22-1 身長が出生か身長が出生から1年で出生時の1.5倍になることや、体重が出生か3~4か月で2倍になることに、とてもおどろいた。</p> <p>R 2-17-1 人は赤ちゃんのときから味覚を持っていて、その味に対する表情をするのでおどろいた。</p>

<p>「凄い」</p> <p>K2-16 脳の発達は凄い。Growth &amp; Development です。成長と共に神経細胞の髄鞘形成が進んで「オンライン化」がどんどんできて凄いと思った。</p> <p>K2-74 改めて人間の成長は凄いと思った、言葉も一語から二語になりしっかりとした言葉を話すまでそこまで時間がかからない。</p> <p>R2-67 ハイハイを5ヶ月で、つかまり立ち7ヶ月でできていて、自分凄いと思った。</p> <p>R2-94 脳の発達が著しいことが凄いと思った。乳児（新生児）の発達が速いのはそのためであることがわかった。</p> <p>R2-115 体重が生後3-4ヶ月で2倍に1年で3倍は凄い成長だと思った。</p> <p>「わかった」</p> <p>K2-70 子どもは無意識でも親や周りの大人に観察してもらえそうな態度（泣いたり、話したり）をとることがわかった。</p> <p>K2-38 色々な反射があり、出続けると逸脱のサインになることがわかった。</p> <p>R2-46 子どもの反射はたくさんあり、それが消失しないと危ないということがわかった。</p> <p>R2-71 6歳で脳重量は約90%になり幼児期の発達は大切とわかった。</p> <p>R2-94 脳の発達が著しいことが凄いと思った。乳児の発達が速いのはそのためであることがわかった。</p>	<p>「凄い」</p> <p>K 2-21 反射は必要なことだけど、次の成長のために自然とその反射が消えて次の行動にうつったりするのが凄いやと思いました。</p> <p>K 2-48-3 幼児というのは小さいのに、その中にとてすごい力を秘めているのだと感じました。</p> <p>R 2-26-4 母親のにおいを他人と弁別できるというのはすごいと思った。</p> <p>R 2-60-2 小さいころの記憶はないけれど、乳幼児期の発達は著しくこんな短い期間に色んな変化をする赤ちゃんはすごいなと思った。</p> <p>R 2-48-1 子供の成長は早いとは感じていたけれど実際に数字でみると約2倍だったりしてすごいなと思った。</p> <p>「わかった」</p> <p>K 2-23-1 産まれてから6歳までの間で脳がとても成長していくことがわかりました。</p> <p>K 2-32-2 2～4歳で脳が一気に成長しているのを見て、この時期の子育てはとても重要なんだと思いました。「三つ子の魂百まで」ということわざがよくわかります。</p> <p>R 2-1 成長には順序性や多様性、方向性があることによって、大きくなることがわかった。</p> <p>R 2-58-1 脳の急激な発達によって成長がはやいとよくわかった。</p> <p>R 2-38-2 脳の発達によるものが大きいことがわかった。</p>
<p>3回目 「わかった」</p> <p>K3-89 異常を見つけるためにも運動の正常をわかるようにしたり、人それぞれ症状が違うからその人にあったやり方を見つけることが大切だとわかった。</p> <p>K3-144 正常な発達と比較してどこがどのように異常なのか判断するのはもちろん重要で、それに至るまでに問診や観察から評価していくところから高いコミュニケーション能力が必要だとわかった。</p> <p>R3-12 小児の理学療法士がしっかり観察して問診し、評価してリハビリをすることでできることが多くなることがわかった。</p> <p>R3-19 正常に発達していくことがいかに大切であるかということがわかった。</p> <p>R3-122 小児理学療法は正常発達について理解することが大事だとわかった。</p> <p>「もっと知りたい」</p> <p>K3-34 知識が乏しいので、たくさん知識をつけていきたい。</p> <p>K3-109 観察をして分析をしなければいけない為、知識を今のうちからたくさん得ていきたい。</p> <p>K3-146 正常発達について詳しく学びたい</p> <p>R3-46 過度な運動をすることによる成長や過度なことは危険と聞いて、もっと詳しく知りたくなった。</p> <p>R3-65 運動評価についてもっと詳しく知りたい。</p> <p>R3-90 運動発達障害をもっと詳しく勉強したい。</p> <p>R3-95 解剖の知識が活用できたが、まだわからないことがあった。これからの授業で理解できるようにしたい。</p>	<p>「わかった」</p> <p>K 3-76 理学療法といたら、怪我を治すためのリハビリというイメージしかなかったが、今回のように障害もっている人の生活レベルを上げるためのリハビリもあるということが分かった。</p> <p>K 3-44 「正常発達」をきっちりと理解していないと発達障害を見つけることが出来ない、ということがいかに大切か分かった。</p> <p>R 3-9-1 小児理学療法で大切なことは、子どものありのままを観察し、正常発達についてきちんと理解しておくということが分かった。</p> <p>R 3-32 小児理学療法において「正常発達」について知ることがとても大切だとわかった。</p> <p>R 3-39-1 医療職を目指すという事は、小児の正常発達を良く理解しておかなければいけないことが分かりました。</p> <p>「もっと知りたい」</p> <p>K 3-52-1 正常発達をいかに認識しているかが大切と聞いていたので、医療の場に出てもしっかり分かるくらいの知識は身につけたいと思いました。</p> <p>K 3-52-2 子どもに対して出来ない所だけをみるのではなく、何ができるのかとか、その子に対して何をすればもっと成長できるのかなど判断できるように観察力をしっかり身につけたいと思いました。</p> <p>R 3-8-2 正常運動が基本であり、どれだけ重要かが分かったので、もう少し学んでいこうと思いました。</p> <p>R 3-39-2 麻痺の症状がある患者はそのような発達の段階までみなくてはいけないので、人間発達学により意識をもって勉強していきたいです。</p>

## 5. 考察

### 5.1. 授業年度における感情表現の比較

平成25年度授業と平成26年度授業による学生の感情表現に有意差がみられなかったことは、平成25年度に得られた結果を支持することとなった。平成26年度の結果においても、1回目の授業でドキュメンタリー動画を活用することにより、学生は身内に何らかの感情を揺さぶられ、「驚いた」「凄い」などの感情を示し、2回目の授業で小児期の正常な成長・発達の知識を獲得したことにより、1回目で子どもの当たり前現象の理由づけができ、「わかった」「興味・関心をもった」ことになった。そして3回目の授業で正常ではない成長・発達への介入結果による生活改善の動画は、学生の知的好奇心を芽生えさせる学びの方向性を示す結果が得られたと考えられる。また、この結果は、看護学科・理学療法学科共に同様の傾向が確認されたことから、それぞれの学科の専門性による対象特性の影響は受けていないことが示唆された。1年次のこの時期は、両学科とも科目進度上専門科目が少ない時期であり、学生の準備状態として新鮮な感覚の中に映像や音声の挿入によって感情が揺さぶられ、それによる学習効果を得た<sup>6)</sup>と考えられる。

次に、平成25年度と平成26年度のデータにおいて、同じ特性と違う特性について述べる。同じ特性は、「感動した」「感心した」「凄い」「素晴らしい」「びっくりした」の感情表現は1回目、2回目、3回目の授業の回数を重ねる毎にデータ数が減少していることである。また、「わかった」の感情表現は1回目、2回目、3回目の授業の回数を重ねる毎にデータ数が増えていることである。この結果は、感情表現の中でも、1回目の授業後に感覚的表現である「感動した」「感心した」「凄い」「素晴らしい」「びっくりした」が学生の身内に現れ、3回目の授業後は知的活動が

加わる感情表現が表出したと言える。つまり、1回目の授業で小児期の成長・発達に関する学習の内発的動機付けがされ、2回目の授業で〈新しい知識の投入〉で1回目の内発動機付けのつじつまが合い、3回目の授業の〈新しい知識の矛盾〉により〈新しい知識の確かめ〉が概念的葛藤の喚起<sup>7)</sup>を起こしたと考えられる。このことは、今回の授業方法は、小児期の成長・発達の学習への動機付けと継続学習への動機付けをねらいとした一つの授業方法であると考えられる。また、平成25年・平成26年度ともに「尊敬する」「不思議に思った」はデータ数が少ない。学生は今回の授業方法からは、これらの感情を表現しない傾向にある。「尊敬する」「不思議に思った」という感情表現と小児期の成長・発達に関する感情表現の関連について検討が必要である。一方、平成25年度と平成26年度で違う特性は、「驚いた」の感情表現である。平成25年度は1回目、3回目に比べ2回目のデータ数が低いのに対し、平成26年度は2回目が1回目・3回目に比べデータ数が多く、平成25年度と逆の結果であった。1回目と3回目は授業方法に動画を取り入れ、2回目の授業は、PowerPointと紙媒体の授業であり動画を用いていない。「驚き」とは、「意外な事に遭遇した心の動き」<sup>8)</sup>の意味を持つことから、平成25年度の学生は成長・発達の動画により心が強く動き、平成26年度の学生は動画に比べ紙媒体での授業がより心が強く動く傾向にあると考えられる。

以上のことより、小児期の成長・発達に関する授業に動画を活用することは、学生の身内の感情を動かし学習の動機付けとして有効な一つの授業方法である為、今後も継続する。また、学生の学習の動機付けを目的として、より適切な動画の選定を教員間で検討し、授業を展開していく。

## 5.2. 授業進度における学びの質的变化

平成25年度と平成26年度の学生の感情表現にかかわる記述データを比較する。平成25年度と平成26年度において記述内容は同様の結果を示し、相違はなかった。1回目の授業後の記述内容は、平成26年の授業後の記述では、発達の高さ・成長の高さ・学習能力の高さに「面白さ」や「驚き」、「感動」を表現している。ドキュメンタリー映像により、学生は単に子どもはかわいいというイメージ<sup>2)</sup>だけでなく、子どもの成長・発達の意外性に感情を揺さぶられたと思われる。次に、2回目の授業後に学生が記述した内容では、「驚いた」「凄い」「わかった」について平成26年度は平成25年度同様、乳幼児の発達について感覚的に捉えた『高さ』などについて、身長や体重・脳の発達など具体的な発達の指標が、年齢と共に記述されている。これは、1回目で学生の身内に揺さぶられた感情に「新しい知識」が導入されることにより意味づけがなされ、「知的好奇心」が芽生える<sup>6)</sup>に至ったと思われる。更に、3回目の授業後は、正常な成長・発達の学習の重要性の再確認や、正確な理解の必要性、医療職の在り方などが「わかった」こととして記述されている。また、知識習得の必要性は専門職業人として必須な知識であることがわかり、学生は確実な知識や観察力の習得に興味・関心を示す結果となった。いわゆる、学生は自分自身の為の知識の習得ではなく、学生の中に援助する対象のイメージが存在し始め、援助者として正常な成長・発達の知識習得は必須であるという意識へ変化し始めたと考えられる。これらのことは、学生が『より深く物事を納得すること』を目標に置き<sup>8)</sup>、学習の広がりや学習の継続が高まる傾向にあると言える。

## 6. 結語

小児期の成長・発達を追った動画を取り入れた授業方法は、小児期の成長・発達の興味・関心を引き出し、継続的学習の動機づけとなることが明らかとなり、本方法論の影響によるものと考えられた。

## 7. 研究の限界と今後の課題

今回の評価は学生の自由記述データを評価したものであり、客観的な測定としては十分でないことが考えられ、そこに本研究の限界がある。また、2種類の動画を用いており、介入の効果を正確に評価しているとは限らず、今後の課題として残る。

## 謝辞

本研究にご協力くださった本学健康科学部看護学科、理学療法学科のみなさまに感謝致します。

## 引用文献

- 1) 加藤千明, 加藤和子, 栗田泰成: 看護学科・理学療法学科の合同授業に動画を用いた効果. 常葉大学健康科学部研究報告集 2-1, 1~9, 2015
- 2) 中嶋一恵, 中淑子, 林田りか: 小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 6, 49~58, 2005
- 3) 鈴木智子, 檜地千恵美: 養護教諭を目指す学生が抱く子どもに対するイメージの変化—乳幼児の生活記録DVD視聴から—. 第40回日本看護学会論文集小児看護 40, 183~185, 2009
- 4) 和田久美子: 看護学生における幼児の理



解に対するビデオ教材の影響．日本小児看護学会誌 16-1, 9～16, 2007

- 5) 稲垣恵子：看護学生にアップガースコアの視聴覚教材を活用した授業の教育効果．聖隷クリストファー大学看護学部紀要 22, 61～70, 2014
- 6) 佐伯胖：「学び」の構造．東洋館出版社, 175～207, 1977
- 7) 鹿毛雅治, 奈須正裕：学ぶこと教えること学校教育の心理学．1～50, 金子書房, 1997
- 8) 新村出編：広辞苑第六版．岩波書店, 412, 2008

